

# 近海漁業資源の家魚化システムの開発 に関する総合研究（抄録）

## 母貝集団形成技術

吉尾二郎・高橋伊武

第Ⅱ期調査において、“放流適期及び放流場の選定基準”をテーマに島根県西部・中部の海域でイタヤガイの放流実証実験を進めてきた。しかし、開放性海域における種苗放流では、小型サイズの逸散が極めて大きく、その後の追跡が困難であった。

今年度は、それらの結果をふまえ、半閉鎖域での小型種苗放流実験を行った。なお、本調査は水産庁マリーナランチング計画の一環として行い、プロGRESS・レポートとして報告済であるので、詳細については既報<sup>\*</sup>を参照されたい。

### 要 約

#### 移 動

分散の傾向は日数の経過とともに潮流方向に拡がり、移動距離はおよそ15～20mの範囲であった。

#### 成 長

放流後の成長はうかがえるものの、全滅までの期間が短かく、全容を明確に出来なかった。

#### 生 残 及 び 食 害

放流から全滅確認までの期間は37日間であり、その間の減耗は食害生物と密接にかかわっていると考えられた。食害生物としては、イトマキヒトデ、ヨコスジヤドカリが代表であった。

\* 昭和61年度「近海漁業資源の家魚化システムの開発に関する総合研究」（マリーナランチング計画）プロGRESS・レポート（7）イタヤガイ・アカガイ 水産庁 日本海区水産研究所